

(7)考察——大型ピット(土坑)

調査区の北半地域(低位段丘上)に群集する大型ピットはその数160基余りである。形態からみて、従来からフラスコピットとか袋状ピット、貯蔵穴と称されている土坑に類似したものと扱えられる。伴出する遺物のほとんどは縄文土器であり、一括して縄文時代の遺構として取り扱っている。ただ遺物を伴わないものもかなりの数にのぼり、弥生又は歴史時代のものがないとは断定できない。

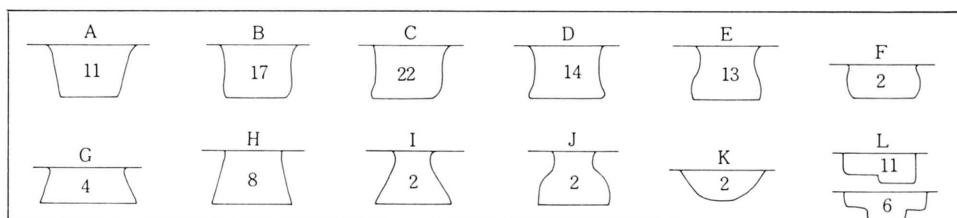
①形態と含有物、遺物

断面形が明確で単独のピットと認定できるものを取りあげ、平面形、断面形、堆積土、含有物の様相から、本遺跡における本来的なピットの形態を求めてみた。

〈平面形〉 検出された開口部の形は、使用時から埋没に至るまでの崩落や検出面までの旧表土分は削平されていることを考え合わせると、必ずしもピット上部の形をそのまま残しているとは言えないが、基本的な掘り込みの形は示しているであろう。その形は円形、楕円形、不整な円形、不整な楕円形、近隅丸方形に分けられたが、複合又は不定形なものを除けば、基本形として円形、楕円形、隅丸方形の3つにまとめられる。平断面の明確なピット95基(第4表～第8表から抽出)の平面形の数と比較すると円形54、不整な円形20、楕円形6、不整な楕円形11、近隅丸方形4という結果である(第10表)。隅丸方形に近いものでほぼ方形プランと認められるのは1基しかない(CH27ピット)。また楕円形も墓壇等に見られるような長楕円形ではなく円形に近い楕円がほとんどである(複合の可能性のあるものは除く)。

また壁や底部の形は開口部に比較して広がるものや狭まるものはあるが、形の上で大きく異なっていない。底面はほぼ平坦であるが、小ピット状の凹みを有するものがある。重複した可能性をもつ複合型(断面L型…後述)においては、底面は二重円構造となり段差をもつものが多い。これは使用時に単独でその形であったのか、大小2つのピットの重複か、もともと単独のピットが周壁の崩壊でその形になったのか吟味する必要があった。ただその判別は難しく、推定に終わる場合が多かった。その点を除けば本遺跡の大型ピットの開口部、壁、底部は、ほぼ円形が基本であり、中に数は少ないが、小ピット状の凹みをもつものがある。

〈断面形〉 大型ピットの断面形を細分すると第57図のようにA～L型と12種に分けられ、残りはその他として一括した。ピットの壁は凹凸ができており、断面図の作成位置によってはその形は多少変化する場合も考えられ、厳密に分類することには不合理性もある。今までの調査例では、フラスコ型、ピーカー型、鉢型など大きく3～4形態に分類されている理由もそこにある。しかし崩落過程や堆積状況などの観察を通して、ピットの本来的な形態をさぐるにはやはり、ある程度の細分も必要と考えて試みた。おおまかに分類すればA、B型はピーカー形に、C～H型はフラスコ形近似の、I、J型はフラスコ形に、K型は鍋底形というように大別



第57図 大型ピット断面類型

できる。

A型—口径が底型より比較的大きい鉢形である。底面の壁際が明確なものが多い。

B型—口径と底径がほぼ等しいピーカー形である。底面の壁際が丸みをもつものが多い。

C型—B型とD、E型の中間的なもので、底部にふくらみを一部にもつものである。

D型—底部にやや末広がりとなっているフラスコ形近似のものである。

E型—底部にふくらみをもつフラスコ形近似のものである。

F型—底部にふくらみをもつ浅い袋状ピットである。

G型—壁が直線的に末広がりとなる浅いフラスコ形近似のものである。

H型—壁が直線的に末広がりの深いフラスコ形近似のものである。

I型—頸部をもって底部に末広がりとなるフラスコ形である。

J型—頸部をもって底部にふくらみをもつフラスコ形である。

K型—口径が広く、底部へゆるやかにすばまる鍋底形のものである。

L型—大小2つのピットが重複したかのように段差をもった複合型のもので、2種ある。

その他、ピットの一部しか断面図をとれなかったものや、ピット上半部が削平されて下半部しか残っていないものや、断面形不明のものがある。

各類型にグルーピングするにあたって考慮した点は、壁の中層部における若干の凹凸は無視することにした。またC型はBとD、E型のどちらに入れるか決めかねるもの、つまり中間形態で個数が多い。形として類似性の高いのはAとB型、DとE型、EとJ型である。

断面形の明確なピットを分類した結果は第57図中の数字で示した。あらわれた断面形は使用時又は廃棄時の形をそのまま残しているものとは言えないが、ここではその類型における個数についてまとめておく。細分のため各個数は少ないが、全体からみて最も多いのはB型とC型であり、次にA型、D型、E型、H型で、少ないのはF、G、I、J、K型となっている。複合型のL型もかなり多い。崩落による断面形の推移については後述するが(→110p)、先に述べたおおまかな大別という見方からするとピーカー形(A+B)は28、フラスコ形近似(C+D+E+F+G+H)は63、フラスコ形(I+J)は4、鍋底形は2となる。つまり近似した形を含めるとフラスコ状(袋状)を呈するピットは、L型を除いた全体の約70%を占める。

〈規模〉 各ピットの計測値は開口部径、底径、深さの3点である。規模を比較する場合、断面形の相違や崩落の有無を考慮すれば、開口部より底部の広さの方がよりふさわしいと考えられ底径と深さを重視した。底部が楕円形で長径と短径があるときは、グラフ化する際にその中間値を取りあげたし、平面図と断面形の底径がくいちがっている場合は断面図の計測値を採用した。深さは検出面からの計測であるが、住居跡等によって削平されていたものはその分加算した値をとった。第58図の1のグラフは、深さと底径の規模の度数分布を見たものである（断面形A～J型）。開口部径はその数と平均値のみ示した。全体的傾向性は次のような点にまとめられる。

○開口部径は80～255cm、底径は75～200cm、深さは40～155cmの範囲内にある。

○濃密な分布を示すのは開口部径120～170cm、底径100～155、深さ90～130cmであり、それぞれの平均値は、開口部145cm、底径約130cm、深さ110cmである。

○複合している可能性の高い断面K型、L型は図示されていないが、開口部や底径の200cmを越すもののがかなりあるが、深さはA～J型におけるものと近似している。

次に各断面類型別に規模の大小を比較したものが第58図2～5のグラフである。その傾向性をみてみた。

○断面A型は、全体の平均値に比較して深いものが大部分であり、底径は小さいものが多い。

断面型B型は平均値に比較し、深いもの浅いもの半々であり、底径は小さいものが多い。

ただ平均値の規模に近接したものが多い。

○断面C型は平均値に近接したものがほとんどであるが、大きく離れたものもある。

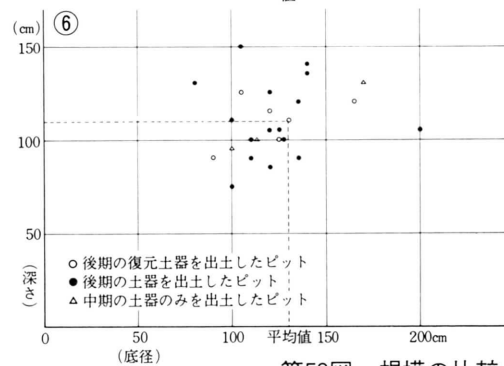
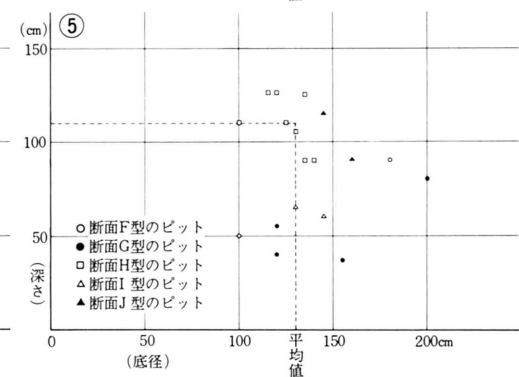
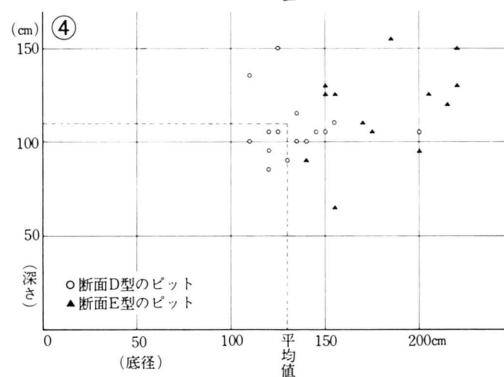
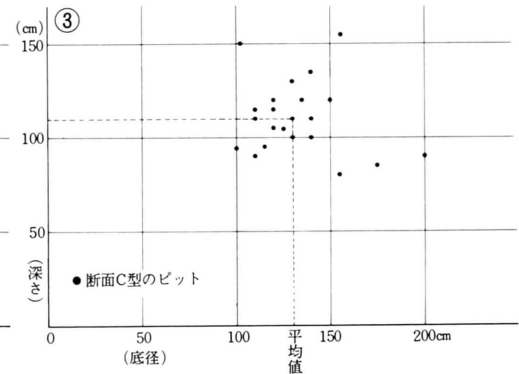
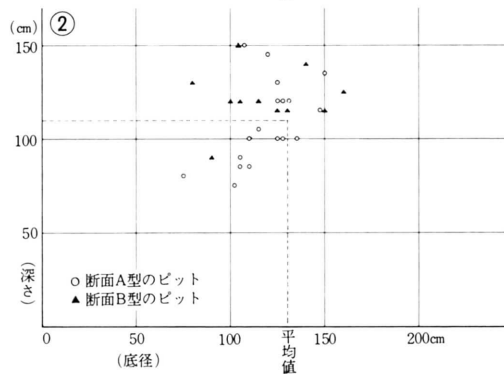
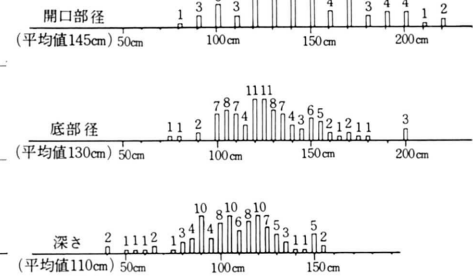
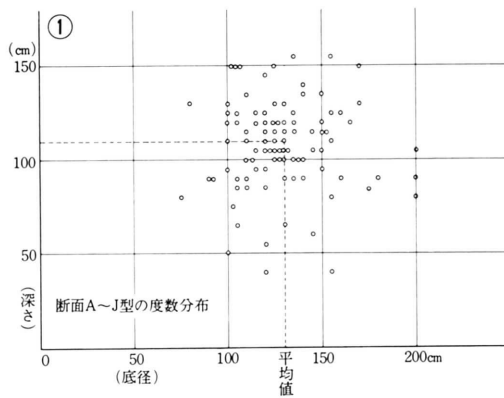
○断面D型は平均値に比較して、深さは浅いものが多いが近接しており規格性が高い。断面E型は深さ、底径とも平均値からかけ離れた値を示すものが多く、規格性は低いと見られる。

○断面F～J型は該当する数が少なく5のグラフに一括している。断面F型、G型、I型は平均値に比較し、底径は大小あるが、深さは浅い。断面H型は平均値に近接したものが多く、断面J型は底径がやや大きめである。

○ピーカー形とフラスコ形として平均値と比較すると、ピーカー形（A、B型）は深くて、底径がやや小さく、フラスコ形（C～J型）は深さと底径のとり値の幅が広く、浅いもののがかなりある。

○規模における類似性、相関性をみると、断面B、C、H型にその高いのが認められる。

遺物を出土したピットの規模を比較してみたのは第58図6のグラフである。後期初頭とみられる土器を多量に又はセットとして底面や中層部において出土したピットはわずかに6基である（図中○印）。その他は破片数が少ないが、上層出土、他の時期のものを含むもの等のピット



第10表 平面形と断面形

断面	A	B	C	D	E	F	G	H	I	j
平面										
円	8	8	15	7	6	2	2	5	0	1
不整な円	1	6	3	3	4	0	0	1	1	1
楕円	1	1	1	1	1	0	0	0	1	0
不整な楕円	0	2	2	2	2	0	1	2	0	0
近方形	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0

第58図 規模の比較と第10表平面形と断面形

(図中●印)である。また図中の△印のものは中期の破片のみ出土したピットである。

ほぼ後期初頭と見られるピットの深さは90～125 cmに、底径は90～155 cmの範囲内となっているし、後期初頭の土器をとにかく含んでいたピットの規模はさらにそのとる値の範囲が大小に広がっている。明確に規定し得る傾向性はとらえられず、全体の平均値や規模の傾向性とほぼ一致すると見られる。中期の土器片を出土したピットについても同様である。

出土した縄文土器の多くは後期初頭、及び中期の土器であり、その両時期にピットの多くが営まれたと考えられるが、その2つの時期差を規模に見出すことはできなかった。

〈堆積土〉 埋没に至る堆積の仕方はそれぞれのピットによって相違を見せている。その要因は自然に流入、崩落堆積した場合、人為的に埋められた場合、両者併用されている場合の3つのあり方が考えられる。そして埋没までの時間的な差異やピットの再利用とか重複など種々の条件によってその様相を異にするものであろう。これらの観察によってピットの用途や使用時形態を知る手がかりを得ることができると思われる。

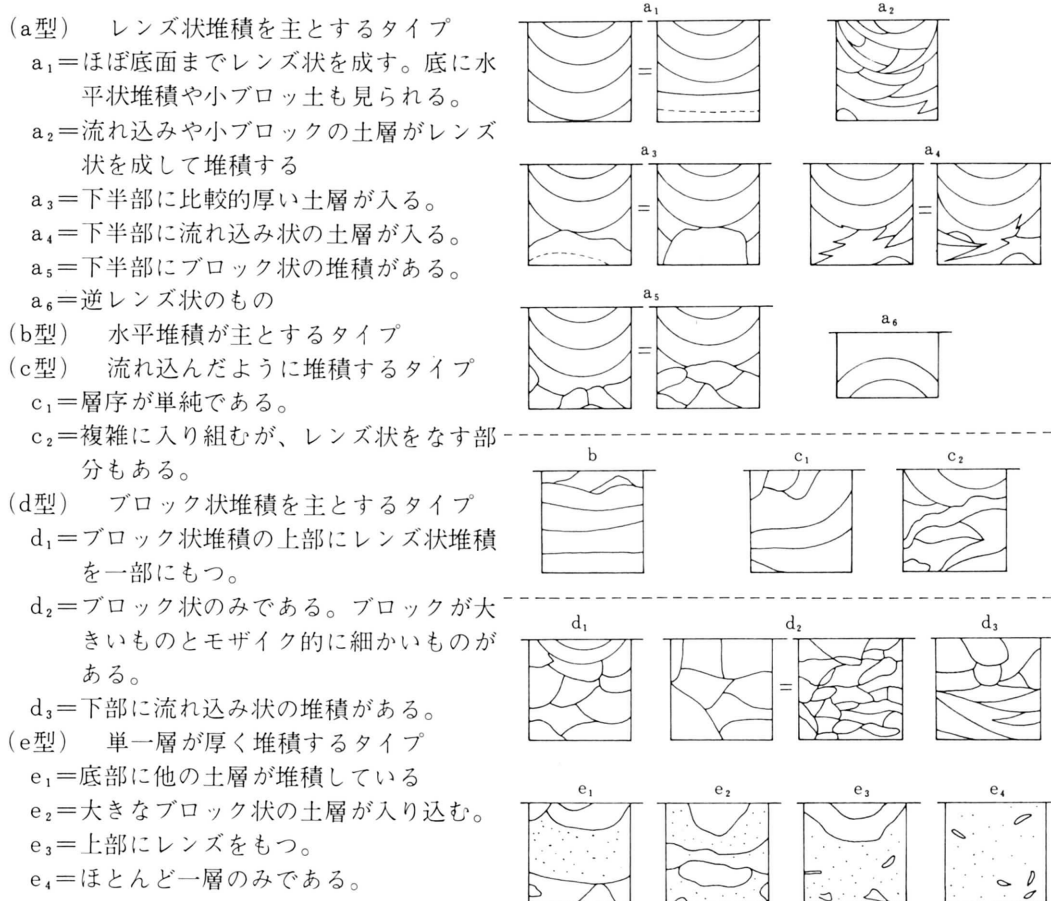
堆積土は大きく分ければ、黒褐色(黒色)腐植土、暗褐色土、褐色土、地山にあたる黄褐色シルトとなり、それらの混合土もみられる。土層断面にあらわれたこれらの層の重なり方を比較すると、幾種類かの類型化ができそうであった。それが第59図の堆積土層の類型である。類型化の視点は、いわゆるレンズ状をなしているかどうか、水平に近いか、傾きをもち流れ込み的か、ブロック状をなしているかである。これらの状況になる要因は、現在もっている認識からすれば次のような想定を念頭に置いている。

1. 何層かにわたって整然としたレンズ状堆積や水平状堆積を示すのは、時間をかけて徐々に進行した結果であり、崩落や流れ込みそして水平化作用の及ぶ自然営力によると思われる。
2. 水平層がピットの底部や中層にある程度の厚さであった場合、その面での一定の時間的な経過が長かったことを意味する。そこで使用されたか、放置されていて長い時間次の埋没がなされなかったと推定される。
3. 傾きをもって流れ込んだようになっているとき、それが概ねレンズ状や水平状をなしている場合は自然的な流れ込みと考えられるが、傾斜の方向が乱雑であったり、量的にどっとかたまっている様相のものは、自然的とか人為的とか限定はできない。時間的な面でいえば、各層間の堆積に至る時間的経過は1の場合より短く、次の4の場合よりは長いと推定される。
4. 土層がブロック状やモザイク状を成すときは、各層が比較的短時間に堆積していったことを示している。これは人為的な埋め戻しによるものとみられるが、自然的なものとするればその流入や崩落が次々と起こり、その間に降雨、流水等の削平や水平化作用を受けなか

った結果であろう。また土層一部にブロック状にあらわれているものは崩落土や投げ捨てと見るべきだろう。

5. ピット内に同質の土層が厚く存在するときは、きわめて短時間の堆積を意味し、この場合も人為、自然とどちらかは速断できない。

以上の5点をふまえ、検出された状況をあてはめ次のように堆積土層を類型化した(第59図)。



第59図 堆積土の類型

a₁～e型の堆積土層を呈するためには、既述の5点の考え方から、次のような条件や要因を推定できるのである。各類型毎にまとめてみた。

(類型) — (各層堆積までの時間) — (崩落や堆積の場所・量) — (層を形成する要因)

- a₁型 — 長い—————ほぼ均等に、徐々に—————崩落、流れ込み (自然)
- a₂型 — 長い—————不均等に—————〃
- a₃型 — はじめ短く、後長い—————はじめ多量に、後ほぼ均等に—————〃

a ₄ 型	— はじめは較的短く、後長い — はじめ不均等に、後ほぼ均等に —	崩落、流れ込み	
a ₅ 型	— はじめ短く、後長い — — はじめ不均等に、後ほぼ均等に —	〃	(自然)
a ₆ 型	— 長い (a ₁ より短い) — — はじめ中央に、後全体的に —	〃	
b 型	— 長い (各層間にa ₁ より間がある) — — ほぼ均等に —	〃	
c ₁ 型	— a ₁ ～bより短い(長い部分もある) — — 不均等に —	崩落流れ込み、埋め戻し投げ捨て	
c ₂ 型	— 〃 — — 〃 — — 〃	(自然)	(人為)
d ₁ 型	— はじめ短く、終わり長い — — 不均等に、終わりほぼ均等 —	〃	〃
d ₂ 型	— 短い — — 不均等に —	〃	〃
d ₃ 型	— はじめ長く、後短い — — 不均等に —	〃	〃
e 型	— 短い — — 不均等に、多量に —	急な埋没(自然による洪水とか)	
		埋め戻し (人為)	

各層の堆積までの時間の長短は、各類型を比較した相対的なものであり、絶対的な時間の尺度ではない。またその中味は、ある層が堆積し次の層が堆積しはじめるまでの時間的経過の長短であり、全体が埋まりきるまでのものではない。ただしほぼ埋まりきるまでに要した時間的長短を比較すれば、b型→a型→c型→d、e型の順で長い→短いが想定されるが、規模との相関や場所、土質的な条件がからんでくるので、一概にはとらえられない。

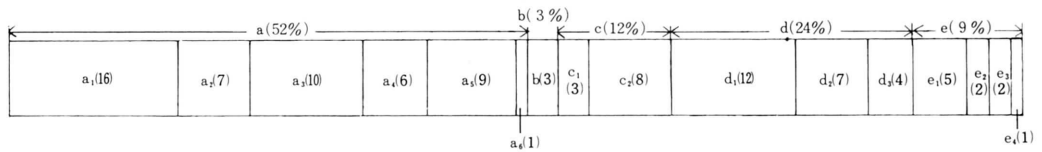
a型の中にブロック状に混入する部分が存在する場合は、自然なブロック状の崩落とともに人為的な投げ込み行為をある程度考えなければならない。

以上のような堆積土類型から、埋没前の大型ピットのあり方を推定すると、a型とb型は空洞のまま放置状態にされていたと考えられ、c型～e型は空洞のまま放置されていたか、又は堆積土が充填されていた場合が考えられる。またピットの構造的な面から見ると、a型においてa₃～a₅型は、ピットの上部が他に比較して崩落しやすい形態をとっていたのではないかとと思われるが、b～e型についてはなんとも言えない。

次に大型ピットの各堆積状況を類型に合わせてグルーピングしてみた(第60図、第11表)。どれに分けるか決めかねるものは、相対的に比較しともかく分類した。したがって統計的な数字をめぐる解釈は、一定の傾向性をつかむ方向でとりくんだ。複合の可能性のある断面K、L型を除く、A～J型における全体的な堆積土類型の数は第60図に示した。この結果によって認められる全体的な傾向は次の如くである。

大別からみればa型(52%)、d型(24%)が多く、b、c、e型は少ない。このことは堆積土の考え方から、空洞のまま放置されていたものが、少なくとも半分以上あり、埋め戻された可能性のあるものは少なかったといえる。また急激な自然力(洪水等)を想定したe型も少ない。

細別からみればa₁型やa₃型、a₅型、d₁型が多い。これはきわめて徐々に埋没したものや、は



第60図 堆積土類型毎の個数

じめに崩落があり後は徐々に埋没したもの、上部まである程度埋め戻されていたものの3つのあり方が大勢を占めていたと考えることができる。きわめて少ないa₆型やb型、c₁型、e₂～e₃型はそのピットが上記の3つのあり方とは大きく異なった要因で堆積したであろうし、ひいては他の大部分のピットとはちがった用途が個々に検討されなければならないグループと捉えられる。

次に堆積土中における黒色（黒褐色）腐植土や地山の土（黄褐色シルト）のあり方は、使用時の床面や埋没過程を知る大きな手がかりになるものである。黒色腐植土が底面にほぼ水平に一定の厚さで存在する場合は、そこにおいて一定期間の活用がなされたことを意味していると考えられる。その堆積が底面に見られるのは25（全体の25%）である。断面類型の中ではD型やH型に比較的多く見られ、堆積土類型では徐々に自然堆積していった様相を示すa型やb型に多く見られる。

堆積土中における地山の土（黄褐色シルト）の混入の仕方には、ブロック状や粒状に、また大量に入っているなどがある。本遺跡の大型ピットの場合、地山の土を深く掘り込んでいるため、当然ながら黄褐色土を含んでおり、全く見られないものは2例にすぎなかった（CH09ピット、DC06複合cピット）。その他のピットは何らかの形で混入している。

その主な要因には壁の自然的な崩落、掘り上げた土の流入と人為的な埋め戻しが考えられる。前者の自然的な要因の場合、堆積土層へのあらわれ方は、量的に多い少ないはあるが、ブロック状に入っているか粒状になって混入しているかであろう。後者の人為的な埋め戻しの場合、掘り上げた土をすぐに埋める行為が必要であったとすれば、かなり多量に入っているはずであるし、又ある程度の使用期間があって廃棄された段階で埋め戻されたとすれば、表土的な黒褐色土が多く入る場合も想定はされる。掘り上げて短時間後すぐに埋めた程の多量の黄褐色土の見られるのは20程あるが、堆積土類型の考え方からすればレンズ状を主体としているものは、おそらく自然的な崩落や流れ込みと推定されるので、それらを除いた10のピットは人為的に埋め戻された可能性をもっていると考えられる。CE50複合aピット、CI 56複合dピット、CI 74ピット、CH50No.1ピット、CG06複合bピット、CG03複合cピット、CG30ピット、CJ 65ピット、DB27ピット、DC50ピットである。断面類型でみるとA型2、D型1、E型3、H型2、L型2となっている。

黄褐色土が自然的な壁の崩落と見られる場合、その量が非常に多いときは、壁の上半部は使用時又は廃棄時の形をほとんどどめていないほど変わってしまっていることが推定できる。ただしこれらの中には掘り上げた土が開口部周辺にあり、降雨、流水等によって大量に流れ込んできた場合も合わせて考えなければならないものであろう。またピット上層部に黄褐色土がレンズ状に存在する場合は、同様に掘り上げた土の再流入堆積があったと考えて良いと思われる。その例はCF03ピット、DC56ピットなど17例あげることができる。

〈含有物と遺物〉 底面や堆積土中に残されていた礫、炭化物、焼土そして遺物等のあり方はピットの用途を推定する手がかりとなるものである。ピットの底部は砂礫層にまでとどいているものが多く、従って礫が堆積土中にあるのは不自然ではないが、多量に含まれている場合は人為的なものを考えるべきだろう。しかし、そのようなものは見られず、上層～下層にまばらに入りこんでいる場合がほとんどである。ただ礫が底面に比較的まとまって残っているのはDB09、CE15、CJ50No.2などである。意図性をもった礫の存在は認められなかった。

炭化物が多量に含まれているのは、DC15(下)、CJ09(全)、DA09(全)、DA12(上)、DA21No.2(全)の5つのピットである。このうちDA12ピットは上層に、DC15、CJ09は下層に多く、DA09、DA21No.2は全体的に多い。そして炭化物を多く含む部分は共通してブロック状の堆積を示していることから、人為的な行為が想定されるが具体的には不明である。その他炭化粒を少量ずつでも含んでいるピットは全体の70%程あり、断面類型や堆積土類型になんらかの傾向性があるか調べて見たが、きわだった特徴は見られなかった。このことは旧表土層には炭化粒がある程度含有されていた地域であったことを示していると思われる。

焼土が含まれた堆積層を持つピットは12であった。そのほとんどは上層に含まれ、流れ込みもしくは投げ捨てと見られるものであるが、下層に存在したのはDA21No.2ピットである。その量は少なく、ピット中において火を使用したとは見られず、投げ捨てと考えられる。

遺物は既述のようにほとんどが縄文土器である。遺物の出土したピットは複合しているものを含めて約80である。そのうち土師器、須恵器片は9つのピットから出土しているがいずれも縄文片と混入し、個数も少ないがCI74ピットは比較的多い。石器は5つのピットから出土しているが1～2点と個数は少ない。特殊な遺物として耳栓の出土を見たのはCJ59ピットと落ち込み遺構Bのdピットの2つである。堆積土がほぼ自然堆積と見られることから墓壙と認められるものではない。

縄文土器のあり方は、破片が少量のときは埋めたての際のまぎれ込み、流れこみと考えられ、破片が多量にあった場合は人為的な投げ捨てや据え置きが、ほぼ完形品が含まれる場合は人為的な投げ捨て、埋設、据え置き等がそれぞれ考えられる。1～10、又は10～20点ほどの破片数を出土したものが過半数を占めるが、破片数40点以上の特に多いピットは7、復元できる個体

を出土したものは13である。底面にほぼ完形に近い深鉢を出土しているのはCH12No.2ピット、CH18No.2ピット、CH50No.1ピット、CJ 03No.1ピット、DB03複合Cピットの5基であるが、これらはすべて横倒しとなったもので、正位又は逆位に埋められた様相はない。置かれていて埋没の段階で倒れたのか、投げ捨てられたかのどちらかであろう。

土器破片を敷きつめるとか、並べた形跡はどのピットにも見られなかった。また土器ばかり大量に入っているというものもない。本遺跡のピットの遺物は自然的な落ち込みと埋め戻しによるまぎれ込み、一時的な投げ捨てによるものであろう。

遺物はピットの設営期を求める手がかりとなる。上層部出土のものは後世の攪乱が及ぶことが考えられ、また少量の破片ではまぎれ込み、流れ込みの可能性がある、結局復元個体を下層にもつものをその土器の時期に使用されたピットと推定した。それが既述の5ピットで土器の形態から後期初頭に位置づけられる。また後期の土器を少しでも含んでいたピットは27、その他は時期比定のできない縄文土器出土であるし、中期土器片は13のピットからである。それらの遺物を出土した80基のピットのうち、断面形の明確なピットについて、規模、断面類型における傾向性は時期別に顕著なあらわれ方はしなかった。数量的な把握ではその限界性を問われるが、出土層位や量から見て、多くのピットは後期初頭につくられたと推定される。

〈断面形とその崩落について〉 ピットの平面形と断面形は使用時又は廃棄時の形態をそのまま残している場合と埋没過程における崩落や崩壊によって元の形をとどめていない場合とが考えられる。前者の場合に廃棄後の埋没がはやかったことであり、人為的な埋め戻しや短時間における大量の流入堆積によってピット内部が堆積土によって充たされた状態にあったことが推定される。とすればそのような堆積土を示すピットが元の形をとどめている可能性が高いと思われる。既述の堆積土タイプの考え方から見ると、類型c型、d型、e型を持つものがそれにあたる。

一方埋没過程で崩落があり、元の形をとどめていない可能性の低いものは堆積土類型a型、b型をもつものであろうと考えられる。そのために断面形と堆積土類型を対応させてみたのが第11表である。数字はその欄にあたるピットの個数である。

この表から、各断面形に対応する類型を見てみた。細分のため個数は少なくなっているが、全体的な傾向性は次のようになる。

断面形A型、C型、E型、F型は堆積土a、b型とd～e型がほぼ半々の比率となっている。また断面形B型、D型、H型、I型は堆積土a、b型に比べ、d～e型が非常に少ない。またG型やJ型においてはd～e型の方が多い。このことから埋没前の元の形を残している可能性の最も高いのはG型、J型、残していないものはB型、D型、H型、I型、半々ぐらいとみられるのがA型、C型、E型、F型となる。

堆積土 断面	a ₁ 型	a ₂ 型	a ₃ 型	a ₄ 型	a ₅ 型	a ₆ 型	b型	c ₁ 型	c ₂ 型	d ₁ 型	d ₂ 型	d ₃ 型	e ₁ 型	e ₂ 型	e ₃ 型	e ₄ 型	計
A型	3	0	0	0	1	0	1	0	1	3	0	1	0	1	0	0	11
B型	3	4	3	0	2	0	0	1	2	0	1	0	0	0	1	0	17
C型	6	0	2	2	1	0	0	0	1	4	2	0	3	0	1	0	22
D型	1	2	2	1	3	0	0	1	1	2	0	0	0	1	0	0	14
E型	1	1	3	1	0	0	0	0	0	3	1	1	2	0	0	0	13
F型	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
G型	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	4
H型	0	0	0	2	1	0	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	8
I型	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
J型	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
K型	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
L型	2	0	1	2	2	0	0	1	5	1	3	0	0	0	0	0	17

表11表 断面形と堆積土類型の対応

次に崩落土（黄褐色土）の含有量から考えられるのは、堆積土中にその含有量が少ないものは大きな崩落がなかったことに結びつくし、多いものは崩落がはげしかったかもしくは掘り上げた土（地山の土）の再流入堆積が多かったということである。従って堆積土がa～c型にあっても黄褐色土の混入が少ないものは、元の形から大きくは変わっていない断面形を呈しており、多いものはその逆として見られる。そこで堆積土中における黄褐色土の含有量が多いピットを堆積土a～c型の中から抽出すると次のようになる。（ ）内は堆積土類型。

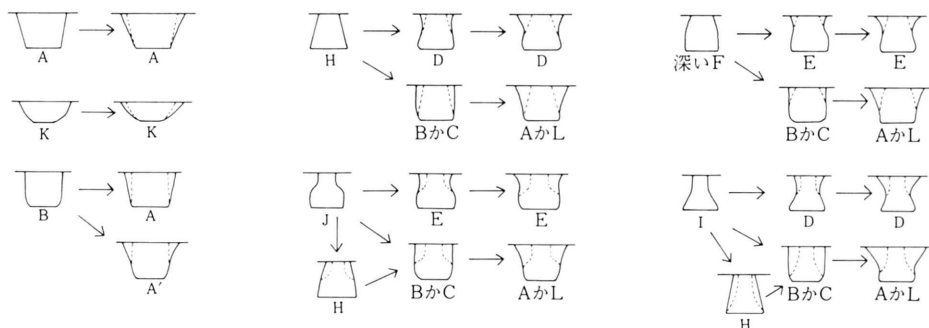
- 断面A型——CH03(b)、CI 09(a₁)、CJ 65(c₂)、DD03No.2 (a₅)
- ✧ B型——DB24複合a(c₂)、DC24ピット(a₅)、DC59(a₃)
- ✧ C型——CE18(a₃)、CG27(a₁)、DD12(a₄)
- ✧ D型——CF30(a₅)、CI 56複合d(c₂)、DB53(a₅)、DC30(a₄)
- ✧ E型——CC 50(a₃)、CH12No.2 (a₁)、CJ 03No.2 (a₄)、DD24(a₃)、DB59(a₂)
- ✧ H型——CG06複合b(c₂)、CJ 09(a₅)

各断面形の堆積土a～c型を呈するものから、上記のピットを除いたものは、崩落土が少なかったと見られ、元の形から大きく変形はしていないものととらえる。そのようにして、これまでの結果を表で示すと第12表のようにまとめられる。

堆積土	断面形	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
㊦ a ₁ ～c ₂ 型(黄褐色土が多い)		4	3	3	4	5	0	0	2	0	0
㊧ a ₁ ～c ₂ 型(黄褐色土が少ない)		2	12	9	7	1	1	2	5	2	1
㊨ d ₁ ～e型		5	2	10	3	7	1	2	1	0	1

第12表

下図は本来のピットの形態から想定される崩落(崩壊)後の断面形である。



第61図 断面形の堆移の想定

上記の崩落による断面形の変化を第12表の数量と合わせてその分析をしてみると次のような考え方、本来のピットの形についての示唆を与えてくれると思われる。

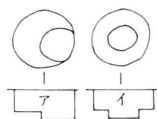
○A型は元の形と見られるのは㊦の5基、変化の少なかった、つまり元々の形がA型やB型であったのは㊤の2基、C型～J型であったのが大きく崩落した結果と見られるのが㊦の4基と推定される。次にB型は、元の形と見られるのは㊦の2基であり、元々の形がC、D、E型と推定されるのが㊤の12基、そして大きく変化した結果、つまりH型やI型やJ型からB型になったと見られるのが㊦の3基というように考えることができる。

○同様にC～J型についても検討してゆくと、崩れる前の元の形として推定されてその個数が増加してゆくのは断面D型～J型であり、特にH型、I型、J型は現存する個数よりもかなり増えると思われる。

○このような分析から、埋没前の元々の形がA型やB型であったと推定される個数は、A型の㊤+㊦の7基とB型の㊦2基、合計9基だけとなり、その他は近似したものも含めたフラスコ形となる。検出された断面形を見るとピーカー形(A+B)28、フラスコ形近似(C+D+E+F+G+H+I+J)67、鍋底形は2となっていた(→104p)、つまりフラスコ形近似のものが、L型を除いた全体の70%であった。しかし埋没前の形態を分析してみた結果、ピーカー形9、フラスコ形近似86、鍋底形2となり、フラスコ形近似のものは全体の約90%となる。本遺跡の大型ピットの設営時の断面形はフラスコ形又はそれに近似のものがほとんどであったといえる。

〈複合型—断面L型について〉 断面形L型としたグループは、2基のピットが重複しているような二重円構造ものとして一括している。重複しているものを除けば、単独でその形であった可能性をもつ。L型の中で重複していないことが明確なものを抽出すると、62図の㊦にあたるピットはCG03複合a、CH77、DB18、DC09、DC15、図のイにあたるピットはCE30、CG06複合a、DA18、DB03No.1である。また1個の単独のピット(断面A～J型)で

あったものが、崩れて断面L型を呈していると思われるのがCI 62 No.2 と DB12複合aの2基である。その他は重複していると見られるものである。断面L型が本来的なピットの形態のひとつとしてあったかどうかは結論づけないが少なくとも埋没の段階では9基ほどあったと推定できる。底面における比較的大きなピット状の掘り込みがどんな用途や意図をもっていたかは不明である。



第62図

〈底面の小ピットについて〉 底面に小ピット状の凹みを有しているものは20基である。その位置はほとんどが底面のほぼ中央にあたる。径30cm程で深さは15cm前後のものが多く、しかも柱穴様に明確な小ピットは、CJ 50 No.1 と DA06ピットの2基に見られるだけで、大部分はゆるく凹んだ形状である。

小ピットを有するものに一定の傾向性があるか、規模、断面形等で調べてみたが特に見い出せなかった。ピット内の水取り穴的な用途は考えられるが、柱穴としては浅いため認めがたい。が、支え棒的なものをたてるためとは見ることができだろう。

〈大型ピットの分布傾向〉 全体的な密集度から見ればCI 区～DC 区にわたる地域に多く集まっている。断面形や規模毎の分布に一定の傾向はなく全域に混在した様相を示している。

後期の土器の出土するピットは比較的西側地域に、中期の土器はC 区全域にという傾向性はあるが、時期比定できない土器の出土も多く、土器による時期別の編在性は把握されなかった。

②大型ピットの用途・性格

各地で発見されるフラスコ形（袋状）ピットやピーカー形ピットなどの土壌は、種々の説が唱えられているが、近年の資料の増加からほぼ植物質食料、種子や堅果類の貯蔵施設という用途が一般的であったと推定されている^(注1)。そして二次的な転用として墓壇や捨て場に利用され、また特殊なものとして「ねぐら」^(注2)、「陷し穴」等が考えられている。東日本でフラスコ形ピット類似の小竪穴が前期末～後期初頭の時期で、特に中期に盛行したと認められるという^(注3)。

大規模な発掘により県内においても多くのフラスコ形ピットが検出され、そのあり方は上記の推定を裏づけているとともに、地域的な特殊性も示しつつある。県内で大型ピットが多数検出された遺跡としては西田遺跡^(注4)（130基）、繫Ⅲ遺跡^(注5)（フラスコ50基）、湯沢遺跡^(注6)（187基）、天神ヶ丘遺跡^(注7)（調査は4基だが東区に確認されたもの160基以上）、長者屋敷遺跡^(注8)（245基以上）、川向Ⅲ遺跡^(注9)（67基）、鳩岡崎遺跡^(注10)（200基以上）などがあげられる。いずれも隣接する住居跡群とともに機能したであろうと推定されている。

本遺跡の場合、検出された住居跡は中期の1棟のみであり、これだけ多くのピットを設営するに足る住居跡群は落ち込み遺構B内域か、もしくは調査区外の東、西域に求めなければならない。しかしその機能、用途面から住居跡1棟につきどのくらいのピットが必要であったか現

段階では明らかでなく、必ずしも大型ピットの数に比例した住居跡数は求めなくても良いものであろう。出土遺物は中期と後期にわたり重複がある。とすれば同時期に機能していた数はこの何分の一かに減少して把握しなければならない。それでもなお同一区域にこれだけ集まって存在していることは用途推定の一つの論拠であろう。

一方大型ピットの分布状況からみれば、既述の遺跡の多くは住居区域内もしくは隣接する形であるが、本遺跡の場合CA12住居跡以外は住居跡が検出されなかったことにより住居跡区域と30～50m以上の距離をもって作られていたと見ることができる。

次に堆積土の様子から空洞のまま放置され自然に埋没したと考えられるものが多く、また人為的な埋め戻しが主と見られる場合も上部まで充鎮されたと思われるものは少ない。これは空洞のまま使用され、また放置されてしまったピットが大部分であったことを意味している。

遺物については、土器を出土したのは約半数で、その多くは破片数20点未満であり、埋納や付設などの意図性のうかがわせるものは非常に少なかった。

また一般的な形態を要約すれば、円形プランを持ち断面やや末広りのフラスコ形近似の形を呈し、底径130cm、深さ110cm程の平均値を示している。

以上の形態とあり方を総合すれば大型ピットの用途は貯蔵穴であると考えるのが妥当であろう。集落に近接したこれらの貯蔵穴が原始共同体の中でどのような規制のものにつくられたのか、自然環境や生業的な側面から今後さらに追求されるべき課題である。

(注1) 昭和56年度考古学協会(埼玉県宇都宮市)で、袋状ピットについて各地域の発表があった。

(注2) 草間俊一「日本原始時代の生活についての一考察」岩手地方史の研究(1969年)

(注3) 堀越正行「小竪穴考」—史観—

(注4) 岩手県文化財調査報告書第56集(55年)

(注5) 岩手県埋文センター報告書第13集(53年)

(注6) 岩手県埋文センター報告書第2集(52年)

(注7) 天神ヶ丘遺跡調査報告 大迫町教育委員会(49年)

(注8) 岩手県埋文センター報告書第12集と第20集(55年と56年)

(注9) 岩手県埋文センター現地説明会資料

(注10) 岩手県文化財調査報告書第70集(57年)